

UDLに基づく単元デザインとルーブリックの活用を通して 深い学びの実現を目指す中学校社会科の授業づくり

新潟市立小須戸中学校 高橋 拓巳 (R 元年度)

1 実践主題設定の理由

これまでの私の指導を振り返ると、社会的事象のつながりが少なく、生徒は断片的な理解に終わることが多かった。生徒の疑問を生む活動やペアワークを取り入れるなどの工夫を行い、生徒の主体性や対話的な学びを支えたが、振り返りや生徒の様子を見ると、社会的事象の表面的な理解で終わり、背景に隠れる事象のつながりや本質を理解するような「深い学び」には至らなかった。

本単元は、「第二次世界大戦」という有名な歴史的事象ではあるが、従来どおりの知識注入型では、表面的な学習になってしまう。そこで、生徒の「深い学び」を実現するためには、生徒の目線に立った単元・授業づくりが必要であると考えた。深い学びについて、田村(2018)は「各教科等固有の学習過程(プロセス)の中で、身に付けていた知識・技能を存分に活用・発揮し、その結果、知識や技能が相互に関連付けられたり組み合わせられたりして、構造化したり身体化したりしていくこと」と述べている。また、米国の研究機関 CAST が示す「学びのユニバーサルデザイン(UDL)ガイドライン」(2018)においても、学習者の理解のための多様な方法の一つに、「背景となる知識を活性化または提供する」とあり、田村の述べる「構造化」と重なると考える。このことから、私は、生徒の深い学びを実現するためには、①UDLに基づいた単元・授業づくりと、②単元の終盤に知識を構造化する活動を取り入れることが重要ではないかと考えた。

2 実践の内容と方法

(1) 実践内容

① UDL ガイドラインに基づいた単元・授業づくり

CAST が示す「学びのユニバーサルデザイン(UDL)ガイドライン」(2018)(資料1)を基に単元をデザインすることで、生徒の「主体的・対話的な学び」を支え、深い学びが実現できるかどうかを検証した。さらに、実際の学習活動がガイドラインのどの内容に位置付くのかを考え、単元計画を作成した。

② ルーブリックの活用

UDL の一環としてルーブリックを提示し、毎時間の授業のゴールの見通しをもたせ、単元を通して、生徒の深い学びが実現できるように活用した。ルーブリックとは、「学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示したもので、おもにテストでは測りにくいパフォーマンスの評価や、高次の思考過程を評価するために使われ」(望月 2019) のものである。授業では、毎時間の冒頭に、生徒がルーブリックに記された到達目標 A・B のどちらからかを選択する。自分に合った目標を選択することで、生徒の主体性を確保し、自分に合ったコースで学習できるようにした。

③ 構造化

生徒の単元での学びを構造化する活動を行った。具体的な活動は、単元の終末において、班で単元の中で学んだ重要単語をカード化したものを模造紙の上に並べ、カードを線でつなぎ、ラベリングを行った(資料2)。この作業を通して生徒たちは話し合い、試行錯誤しながら単元の整理を行った。

(2) 授業実践 (令和5年6月～7月)

対象分野	歴史的分野 3年生「世界恐慌と第二次世界大戦」	全 12 時間
対象生徒	新潟市立小須戸中学校 3年 1組(37名)	

(3) 検証方法 (資料2)

- ① 生徒の授業後の「学習内容」の振り返りから、ルーブリックとの関係性を比較し、深い学びにつながるような記述がなされているか検証する。
- ② 生徒の授業後の「学び方」の振り返りから、UDLの手立てが有効であったかを検証する。
- ③ 単元末に行う深い学びにつながる「構造化」のイメージマップ(資料3)において、ラベリング等で概念化された知識の記述がいくつ見られたかを検証する。

3 実践実際

(1) 単元について

① 深い学びの位置付け

中学校社会科学学習指導要領解説(平成29年)に記されているように、本単元では、第二次世界大戦を幅広い視点から学習をし、理解を深めていく。ただし、それぞれの知識をただ理解していくのではなく、単元の学習を通して「国際協調や国際平和」の実現の重要性に気付くことが求められる。そこで、単元末に獲得した知識を構造化させ、その先にある「国際協調」・「国際平和」の重要性に気付くということを深い学びとした(資料4)。

② UDL と単元構成 (資料5)

前時までの「第一次世界大戦」の学習と、学習指導要領を踏まえて、単元を貫く学習課題を「なぜ人間は、再び世界大戦を引き起こしてしまったのか?」と設定した。単元を貫く学習課題を探究し、最終的に国際協調と国際平和の重要性に気付く、平和な世界に求められることについて考え、表現することができるように進めていった。以下は、単元構成と UDL ガイドラインの位置付け、ルーブリックの内容の一部である。(表の中の数字は UDL ガイドライン(資料1)に記されている項目の数字である。)

	学習課題と学習活動	ルーブリック(6.1・6.2・8.1・8.2)
2 時 間 目	<学習課題> 「世界恐慌は第二次世界大戦の原因となったのだろうか?」 <学習活動> ・前時の振り返りの確認(7.2・8.4) ・ルーブリックの確認(6.1・6.2・8.1・8.2) ・調べ学習(世界恐慌・ニューディール政策・ブロック経済) (1.3・4.2・5.1・7.1・8.2・8.3・8.4) ・振り返り(6.4・9.1・9.2・9.3)	【A】 「世界恐慌」とそれに対する政策について理解することができる。そして、第二次世界大戦と「世界恐慌」がどのように関係するのか、各国の視点から考えることができる。 【B】 「世界恐慌」とそれに対する政策について理解することができる。さらに、「世界恐慌」が第二次世界大戦にどのよ
3	<学習課題>	

時間目	「持たざる国は、世界恐慌をどのように乗り切ろうとしたか？」 ＜学習活動＞ ・前時の振り返りの確認(7.2・8.4) ・ルーブリックの確認(6.1・6.2・8.1・8.2) ・調べ学習(ファシズム)(1.3・4.2・5.1・7.1・8.2・8.3・8.4) ・振り返り(6.4・9.1・9.2・9.3)	うな影響を与えたのかについて、考えることができる。
-----	---	---------------------------

(2) 実際の生徒の姿 (資料6・7・8)

① 「学習内容」の振り返りとルーブリックとの関係性の検証

単元の始め(2・3時間目)・中盤(7・8時間目)・終わり(11・12時間目)において、生徒 A(上位)・生徒 B(中位)・生徒 C(低位)の3名を抽出し、単元を通して深い学びにつながる記述が見られたかどうか分析した。

< 2・3時間目の振り返り >

○ルーブリックと関係している記述や深い学びにつながる記述が見られた生徒：11人(61.1%)
○ルーブリックと関係している記述や深い学びにつながる記述が見られなかった生徒：7人(38.8%)

○生徒 A の振り返り

振り返り	ルーブリック
第二次世界大戦について勉強し、～(中略)～これに対してニューディールやブロック経済などの政策を行うことがわかりました。特にブロック経済では仲のいい国同士で経済を進めてそれ以外の国では関税を高くするなど自分たちの国のためにみんな必死になって対策していたんだとわかります。今までに結んだ平和にしていこうという取り組みも経済のせいで崩れていきそうだと思います。～(中略)～。	【A】「世界恐慌」とそれに対する政策について理解することができる。そして、第二次世界大戦と「世界恐慌」がどのように関係するのか、各国の視点から考えることができる。

生徒 A は、ルーブリックに示されているとおり、世界恐慌の各国の対応についてまとめ、さらに、「自分たちの国のためにみんな必死になって対策していたんだとわかります」という記述から、国際協調から離れた当時の社会状況を理解していることが分かる。特に後半部の「今までに結んだ平和にしていこうという取り組みも経済のせいで崩れていきそうだと思います」は、ルーブリックの波線で示した部分と一致し、単元を貫く学習課題の一因として、「経済の崩壊」に着目している。この着目点が単元を通して、国際協調の必要性という視点に変化していくことをねらっている。

○生徒 B の振り返り

振り返り	ルーブリック
第二次世界大戦が世界恐慌が起こったから戦争をせざるをえなかったのかなと思いました。イタリアのファシズムもドイツのファシズムも独裁でありよくないと思いました。当時のドイツの人にとっては危機に現れたヒーローみたいな存在だったかも知れなかったけど、やっていることはユダヤ人の迫害や共産主義者を攻撃したりといいことではなかったです。～(中略)～。	【B】「世界恐慌」とそれに対する政策について理解することができる。さらに、「世界恐慌」が第二次世界大戦にどのような影響を与えたのかについて、考えることができる。

生徒 B は、世界恐慌を第二次世界大戦の原因と考えてはいるが、その理由は見られない。さらに、「ファシズム」についての記述も見られるが、思考が世界恐慌とつながっておらず、知識が断片的となっていた。

○生徒 C の振り返り

振り返り	ルーブリック
銀行が倒産して、企業が倒産して、失業者が増えるという悪循環が続いている事がわかりました。その対策としてブロック経済などが行われたことがわかりました。首相がヒトラーになってから他の政党がなくなったり、憲法が停止されたりがあって、本当におかしいと思います。あとやり方が洗脳っぽいし、めっちゃユダヤ人迫害して殺すわ、独裁するわで、マジ嫌いだと思いました。	【B】「世界恐慌」とそれに対する政策について理解することができる。さらに、「世界恐慌」が第二次世界大戦にどのような影響を与えたのかについて、考えることができる。

生徒 C も生徒 B と同様に、「世界恐慌」「ブロック経済」「ヒトラー」など一つの記述は見られるが、それぞれの知識が断片的であり、つながっている様子は見られない。生徒 B も生徒 C も、単元の終盤における知識の再構成で、獲得した知識がつながり、深い学びが実現するかを見ていく。

< 7・8時間目の振り返り >

○ルーブリックと関係している記述や深い学びにつながる記述が見られた生徒：19人(86.3%)
○ルーブリックと関係している記述や深い学びにつながる記述が見られなかった生徒：3人(13.6%)

○生徒 A の振り返り

振り返り	ルーブリック
第二次世界大戦のきっかけについて勉強し、独ソ不可侵条約を結んだ上でドイツはポーランドに侵略したためこれをきっかけに第二次世界大戦が始まったことがわかった。～(中略)～そして太平洋戦争について勉強して日本は強いアメリカに対して戦争をしようとしたのは完全に間違えたのだと思います。日中戦争がずっと続いているのは援蔣ルートがありこの援蔣ルートを切るために、アメリカに対して戦争をふっかけたと思いました。中国との戦争が終わらないのも支援があるからこそで日清戦争で勝った日本はこの日中戦争では負けたくないんだと感じました。でもこのままだと日本は日中戦争も、太平洋戦争も、第二次世界大戦も負けそうだと思います。全て列強が敵だからです。	【B】第二次世界大戦の対立について理解することができる。また、大戦が始まった直接的なきっかけについて考えることができる。(選択した) 【A】第二次世界大戦の対立について理解することができる。また、大戦が始まったきっかけを、これまでの学習したことと関連付けて考えることができる。(選択していない)

ルーブリックに示された、第二次世界大戦の対立や原因について理解している記述が見られる。さらに、前時までに学習した「日中戦争」や「援蔣ルート」との学習と結びつけて学習しており、選択はしなかったがルーブリックの A コースの内容ともリンクする。生徒 A は、ルーブリックに沿った記述内容が見られ、本時でのねらいにも達していた。

○生徒 B の振り返り

振り返り	ルーブリック
第二次世界大戦が始まったきっかけがドイツにポーランドが宣戦布告をしたからだとなりました。～(中略)～それをみたイタリアがドイツ側に参戦したのは都合が良すぎと思いました。～(中略)～。	【B】第二次世界大戦の対立について理解することができる。また、大戦が始まった直接的なきっかけについて考えることができる。

一方、生徒 B は、前時までの学習とのつながりが見られる記述はないが、ルーブリックの B コースに沿った記述が見られた。さらに、イタリアの参加など、本時で理解してほしい第二次世界大戦の対立構図も理解で

きていると考えられる。

○生徒 C の振り返り

振り返り	ルーブリック
ドイツがポーランドに侵略し、イギリスとフランスの援助を受けたポーランドがドイツに宣戦布告したことで第二次世界大戦が始まったことがわかりました。その後イタリヤと日本がドイツ側に参戦し、自独伊三国同盟を結び、独ソ不可侵条約を結んでいたソ連に侵略したということも分かりました。ソ連からしてみれば、同盟を結んでいたドイツに侵略されるのは訳わかんないと思うし、枢軸国と連合国に別れた時にそりゃ対立するよねって思いました。長期化していた日中戦争の中で、援蒋ルートを断ち切りたい～(中略)～	【B】第二次世界大戦の対立について理解することができる。また、大戦が始まった直接的なきっかけについて考えることができる。

生徒 C もルーブリックの目標に達成することができた。さらに、前時までの内容にも触れ、単元が進むにつれて、学習した内容のつながりが見られるようになっていった。

<11・12 時間目の振り返り>

○ルーブリックと関係している記述や深い学びにつながる記述が見られた生徒：22 人(95.6%) ☆そのうち、「国際協調や国際平和」の実現の重要性などの深い学びにつながる記述が見られた生徒：14 人(60.8%) ○ルーブリックと関係している記述や深い学びにつながる記述が見られなかった生徒：1 人(4.3%)
【A】今まで学習したことを整理して、自分が考える「第二次世界大戦が起こってしまった一番の理由」を考えることができる。また、「どういった世界なら、平和なのか」、自分の考えを表現することができる。 ※本時では A コースのみ提示

○生徒 A の振り返り

振り返り
なぜ人間は再び第二次世界大戦を引き起こしてしまったのかについて勉強して、模造紙に第一次から第二次の戦争までを整理して、終戦までの流れを頭の中で整理することができました。私はこの再び戦争を起してしまった一番の理由は世界恐慌だと思います。でもこれだけが第二次世界大戦を引き起こした二つの理由ではなく今まで起こったいろんなことの積み重ねが大きな戦争につながるきっかけになったと思います。～(中略)～この時代と現代ではこの時代はみんな自分たちで精一杯ですが現代では何か大きな事件があった時、助け合っているなのでその協力という考えがこの時代にはなかったのだと思います。だからどの国も悪いと感じます。この残酷な時代で多くの人を犠牲にし、現代の平和な世界に成長していったんだなと思いました。

○生徒 B の振り返り

振り返り
戦争の始まりは植民地などの土地が関わっていると思いました。第一次世界大戦の時も民族間での土地の争いが原因だったからだと思います。～(中略)～私が思う平和な世界は戦争がない、どの国も自分達の国が足りないところを補うことができる世界が作れると平和になると思いました。

○生徒 C の振り返り

振り返り
世界大戦が起こったのは世界恐慌からだだと思います。世界恐慌が起こった時に、アメリカやイギリスなどの植民地を持つ国は、ブロック経済やニューディールなどの政策を取ったけど、ドイツなどの持たざる国はそのような政策を取ることができず、戦争になってしまったから、植民地を持つ国だけで政策を取るのではなく、持たざる国も一緒に協力すれば戦争は起らなかったと思います。～(中略)～意見が分かれても、戦争などで解決するのではなく、全世界の人が納得するような解決方法を話し合ったり、妥協をしたりして解決できたら一番平和だと思います。～(中略)～

生徒 A も B も C も着目点はそれぞれであるが、ルーブリックに示された「第二次世界大戦が起こってしまった一番の理由」について、記述することができた。

<単元を通しての振り返りの変遷>

特に、学習に困難を示す生徒 C は単元を通しての学びが深まっている様子が見られた。2・3 時間目では、単純に理解した内容の記述や感想のみであったが、11・12 時間目では、世界恐慌が原因という表面的な理由ではなく、各国の社会状況について触れ、持たざる国が戦争を選択することになった理由を記述できた。そして、その記述は断片的なものではなく、世界恐慌の裏に隠れた歴史的な事象と第二次世界大戦とを関係付けて述べることができている。この振り返りの変化から分かるように、生徒 C の学びが単元を通して深まったと考えられる。これは、ルーブリックに示した目標を達成し確実な知識を得たこと、さらに獲得した知識を構造化することで各知識がつながり、単元を通しての学習が繋がったことが要因になったのではないかと考える。

また、生徒 A も B も C も、国際協調の重要性についての記述が見られた。ルーブリックや構造化が直接的に影響したのかは明確に示すことができないが、毎時間の学びのゴールをルーブリックで示して確実な知識を単元を通して確保することと、構造化の時間で獲得した知識を関連付けることで、確実に生徒の振り返りの記述内容に変化が見られた。

② 「学び方」の振り返りによる UDL の手立ての検証(資料9・10・11)

生徒の「学び方」の振り返りから、UDL の手立てが有効に働いたかどうかを検証した。(波線は、UDL ガイドラインに記される学び方に該当する記述)

○生徒 A

2	学び方として仲間とプリントを書きながらブロック経済ってなんのこと？って話したり、他の国はどうやって対策しているかについて話し合ったり、先生の話の聞いたり教科書を見ながら気付いたことを言い合ったりできました
3	(8.3)。そのおかげで世界恐慌について詳しく知ることができ、第二次世界大戦とどう関わっているのかについて少しづつ疑問の解決に向かうことができたと思います。ルーブリックは最初に自分が目指すところを設定した(7.1・8.1・8.2)ことで授業中、何がどうなってこうなったのかなどきちんと整理しながら勉強することができた(6.2・6.4)と思います。
7	今日は班での活動で教科書を見ながら穴埋めをしました。今日もわからないことは教え合い、いろんな問題を解決することができました(8.3)。ルーブリックも活用しながら振り返りを書く時もそれを意識して書くことができた
8	し、具体的な目標があるからこそ深い学びができたので良かったです。次の社会は授業中や穴埋めをしながら自分が設定したルーブリックの目標を忘れず少し思い出しながら勉強していけたらいいなと思っています(6.2・6.4・7.1・8.1・9.3)。
11	今日の授業で模造紙を使って、班のみんなと一緒に考え、意見や質問を言い合いながら勉強することができまし

12	た。大きい紙一つにまとめることで自分の頭の中でごちゃごちゃになっていたのが整理されて、今日のルーブリックである第二次世界大戦を引き起こした1番の理由について考えることができました。整理するととてもわかりやすかったです(3.1・3.2・3.3・8.1)。
----	--

生徒Aはルーブリックについて、目標設定をすることで学習の見通しをもてることや、自分の学習状況をモニタリングできること、振り返りの際の視点になることなどを評価していた。ルーブリックが生徒Aにとって有効に働いたと考えられる。さらに、7・8時間目では、「具体的な目標があるからこそ深い学びができた」と振り返っている。このような記述からも、ルーブリックで目標が明確になることで学習が充実し、ルーブリックが有効に働いたことが分かる。

○生徒B

2・3	友達と疑問を言いながら学習しました(8.3)。ルーブリックのBの世界恐慌が与えた影響についても考えることができました(8.1)。教科書を使って学習しました(2.5)。
7・8	今日は、友達とずっと気になっていた第二次世界大戦が始まったのかを話し合いながらできたのでよかったです(8.3)。
11・12	最後にイメージマップにまとめて考えやすくなりました。前に学習したことが思い出せてよかったです(3.1・3.2・3.3)。

生徒Bは、協働学習について評価している。特に、2・3・7・8時間目では、仲間と疑問を共有しお互いに目的意識をもって協働していたことが分かる。協働することができるのは、生徒それぞれが本時や単元での目標を明確に理解しているからであり、ルーブリックでの目標の提示に効果があったと考えられる。

また、11・12時間目では、イメージマップを用いた「構造化」について評価している。ねらいとしていた単元を整理することに、「構造化」が有効に働いたのではないかと考えられる。構造化の際に「第一次世界大戦」というキーワードも用いており、単元全体を見て、当時の国際社会の社会的事象を理解しての記述がなされており、「国際協調」の重要性についても気付いていることが分かる。

以上のような振り返りの記述から、生徒Bにとって今回の手立てが有効に働いたと考える。

○生徒C

2・3	今日もみんなでやりました(8.3)。AとBがどっちもいたので、バランスよくどっちもできたと思います(8.1)。今日はiPadではなく、教科書を使って調べて話し合いました(2.5)。
7・8	いつも通り友達とやりました(8.3)。最近ルーブリックを活用できていないと思ったので次の時はしっかりルーブリックに沿って考えて行けたらいいなと思いました。
11・12	複数人でやりました!(8.3)

生徒Cは、単元全体を通して、仲間との協働学習について評価している。生徒Cは、学習に対して前向きではないが、仲間との学習である程度、毎時間の学びを進めることができていた。さらに、7・8時間目では、「最近ルーブリックを活用できていないと思ったので次の時はしっかりルーブリックに沿って考えて行けたらいいなと思いました」と振り返りを行っている。その結果、先ほど見たとおり、11・12時間目では、単元の始めと比較して、学びが深まった姿を見ることができた。このような姿から、生徒Cにとっても、ルーブリックやUDLの手立てが有効に働いたと考えられる。

③構造化の検証(資料2)

前項の生徒の姿でも述べたが、単元の終盤で行ったイメージマップを用いた構造化が有効に働いたかどうかを検証した。以下の表は、構造化した中で、生徒たちが概念としてどれだけラベリングをすることができたのかをまとめた表である。生徒たちがまとめたイメージマップにおけるラベリングの数をまとめたが、1班に3～4個程度であった。ただし、内容ごとに差が見られ、構造化にはまだ改善の余地が見られる。

班	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班
ラベリングの数	4個	3個	3個	1個	3個	3個	0個	3個

(3) 成果と課題

<成果>

11・12時間目の最後の振り返りにおいて、6割以上の生徒が深い学びにつながる記述をしている姿が見られた。実際の生徒の姿でも見てきたとおり、抽出生徒はいずれも生徒の学びが深まった姿を見ることができた。学級全体でも、ルーブリックに沿った記述を書くことができる生徒が、単元の始めは6割であったが、最終的に9割以上にまで増加した。さらに、生徒が記入した学び方の振り返りにおいても、ルーブリックや他者との協働学習、構造化などの手立てを肯定的に評価しており、本実践で行った①UDLに基づいた単元・授業づくり②ルーブリックの活用③構造化は、生徒の深い学びを実現することに有効に働くことが分かった。

<課題>

全ての生徒にとってルーブリックが有効に働いたわけではなかった。さらに、生徒Cの7・8時間目の振り返りに書かれているように、ルーブリックを活用できなかった生徒も見られた。そういった生徒への対応や、ルーブリックの内容自体の吟味が必要である。

また、「構造化」で、どの班も断片的になっている知識をつなげることはできたが、さらにその知識のつながりをまとめてラベリングし、概念的な知識にするまでには至らなかった。イメージマップの使い方や、ラベリングについての学習が不十分であったと考えられる。これからの授業において、深い学びにさらにつなげていけるよう「構造化」のあり方を模索していきたい。

【引用文献】

- ・CAST 2018「学びのユニバーサルデザイン(UDL)ガイドライン」udlguidelines.cast.org | © CAST, Inc. 2018 | Suggested Citation: CAST (2018). Universal design for learning guidelines version 2.2 [graphic organizer]. Wakefield, MA: Author.
- ・スコット・ラビンスキ,ジェナ・W・グラベル,デイビッド・H・ローズ,2018「第2章 実践のためのツール:UDLガイドライン」スコット・ラビンスキ,ジェナ・W・グラベル,デイビッド・H・ローズ編,バーンズ亀山静子訳『UDL 学びのユニバーサルデザイン』東洋館出版社
- ・文部科学省,2018『中学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社
- ・田村 学,2019『深い学び』,東洋館出版社
- ・望月俊男,2019「第7章 新しい学びの評価方法と考え方 7.1 深い学びの評価」,大島 純,千代西尾裕司編『主体的・対話的で深い学びに導く学習科学ガイドブック』,北大路書房